

「明暗」の人名について

—— 漱石の作中人物の命名法の考察 ——

福田金光

The Names of Characters in “Meian,”

by

Kanemitsu FUKUTA

I 作品と人物名

1 作品中の人物の一般的命名法

(1) 実社会の人間の名は、他の人間と識別する符号であるばかりでなく、親や名づけ親の期待する性格や将来、または血縁関係や出生時の状況などを表わすことが多い。作品中の人物名も、随意に電話帳を開いて、無差別に抽出した名を採って用いるというようなことは稀で、少なくとも主要人物については、その人物の性格を暗示するとか、モデルその他の実在人物などとの関連を考慮して命名されるのが一般である。人物名から自然に受けるイメージや意味によって、作品の効果をそこなわないばかりでなく、積極的に高めるように意図すべきものであろう。

(2) 鷗外のキタ・セクスアリスの主人公^{かな しづか}金井 湛^{きんせい きんせい}は、しづかな哲学者である。近世（金井）哲学史を大学で講義している。「講義は直観的である物の上に強い光線を投げることもある」恐らく、^{しづか たた}湛に湛えた井戸の水の中にある黄金が光るのであろう。

森鷗外は本名林太郎、諱を高^{いみな たかやす}湛^{みなもと}といい、姓は源である（井戸もまた水なもと即ち水源の一つである）。父の名は静泰、維新後静男と改めた。金井湛のように「一度も自分から攻勢を取らねばならないほど強く性欲に動かされたことはない」という男の家庭は、さぞ家内静かなことであろう。なお、鷗外の実妹喜美子の夫は小金井良精である。

2 漱石の命名法の傾向

(1) ¹⁾「漱石は、人名を初め、いろんな名前をつける時に、案外心を患わしていない。気軽に付けている」と荒正人氏は言うが、作品名も人物名も自分の子どもの名も、探究すれば意外に多くの埋蔵された意味が発見される。

(2) 周知の如く^い虞美人草の命名は「昨夜豊隆子と森川町を散歩して草花を二鉢買った。植木屋に何と云ふ花かと聞いて見たら^い虞美人草だと云ふ。折柄小説の題に窮して豫告の時期に後れるのを気の毒に思って居ったので、好加減ながら、つい花の名を拝借して巻頭に冠らす事にした。…」と新聞の予告にあるにもかかわらず、項羽の寵妃^い虞の血で染まった末路と驕慢妖艶の女主人公藤尾の最後を重ね、かつその性格を象徴するには、適切至極の題名と思われる。小坂晋氏の最近の研究によれば、漱石多年の思い人と推定される大塚楠緒子の作品名に、3年前既に虞美人草がある。藤尾と楠緒子の類似点も少なくない。1年半前に刊行された同女著「晴小袖所収の^い霜夜は、結婚の決まった女主人公藤子が自分を慕う幼馴染の数男に^い金時計を持つよう

与え別れ行く筋で、藤子と金時計は虞美人草の藤尾と金時計の取り合わせを思わせ、保治（楠緒子の夫）の郷里群馬県の藤尾のモデルは楠緒子だという伝説と、金銀張り分けの時計を胸に下げていた女学生時代の楠緒子を想起させる」と漱石の愛と文学にある。なお、楠緒子（ナオ子ともいう）は、楠を藤に、緒を尾に変えれば藤尾となる。

また、それからの予告は、作者自らその三重の意味を説明している。

(3) 漱石の長男の純一という名については、「唯、紙に色々な字を書き並べその中から、この純の字を選ったのだという話である。もっともその際鈴木三重吉さんと小宮豊隆さんが御祝いに鯛をくれたので、いっそ鯛一にしてしまおうかという案もあったという事である」と次男夏目伸六氏の父夏目漱石中の父の命名にある。それにしても鯛一は漱石の敬愛した長兄大一（後、大助）と音訓が酷似している。純の字を選ったのは、純一無雑の純一から採ったものであろう。一は勿論、長男の意味も表わしている。

次男の伸六の場合も「これは、エイ、アイ、に比較すれば、幾分原始的ではあるけれども、まだ少しは意味がある。申歳に生れた六番目だから、申六にしようという所を、それでも人間だからという小宮さんの発議で人偏をつけて、伸六にしたのだという」と、同書にあるが、それもそうであろうが、なつめの新しい芽がすこやかに伸びることを期待したものとも考えられる。想像をたくましくすれば、かつては敵視したかの如き大塚伸子（楠緒子の母）への和心を楠緒子に披瀝する意も秘められていたかも知れない。ちなみに、楠緒子の夫となった小屋保治の兄の子に道治、ちさよ、静江、民三、四郎などがあるが、道治は野分の道也、ちさよはちよとさよに分れて彼岸過迄の千代子と虞美人草の小夜子、静江はこころの静子、民三と四郎は合わせて三四郎の小川三四郎と、それぞれ名だけでも関係が深い。また、保治の母はみちで、それから三千代がある。

伸六の姉エイやアイにしても、Aはアルファベットの始め、アイはアイウエオの一、二番目の字である。老子の「一、二を生じ、二、三を生ずる」万物の始めをもって、娘の名としたとも考えられ、「腹立ちまぎれの気合」などではないであろう。

最愛の末子の名ひな子に至っては、²⁾ 和田謹吾氏に「楠緒子の作中の＜雛江＞の名がさりげなく実在の人名に＜ひな子＞として現われ……」という指摘もある。夏目鏡子の漱石の思い出の中の雛子の死には、宵雛のお祭りをしているとき生まれたので、節句にちなんで雛子と名づけた、という趣意が書かれているだけで、漱石自身の意中は、だれにも明かされていなかった。なお、ひな子は彼岸過迄では、宵子となっている。またとないよい子の意味も含まれているように思われる。

(4) 小川三四郎については、三四郎の八に作者のそれとない説明がある。「用談があって人と会いの約束などする時には、先方がどう出るだろうという事ばかり想像する」。また同じく五に、「『何処か静かな所はないでしょうか』と女が聞いた。谷中と千駄木が谷で出逢うと、一番低い所に小川が流れている。……三四郎は東京へ来てから何遍この向側を歩いて、何遍此方側を歩いたか善く覚えている。美彌子の立っている所は、この小川が、丁度谷中の町を横切って根津へ抜ける石橋の傍である。……美彌子と三四郎の間は四尺ばかり離れている。二人の足の下には小さな河が流れている。秋になって水が落ちたから浅い。角の出た石の上に鶺鴒が一羽とまったくらいである。三四郎は水の中を眺めていた。水が次第に濁って来る」

三四郎は複雑に物事を考える男である。小川の両側を何遍も歩く。美彌子は小川の石橋の傍

に立っているが、四尺ばかり離れている。二人の水は浅くなったけれども、鶴鴿が一羽いるだけでは片思いにならざるをえまい。小川の両側に三郎と四郎に分裂して、あれこれと考えすぎる小川三四郎は、考えているうちに、水が濁るように、頭が混濁してくる。

俗に小川三四郎は小宮豊隆、佐々木与次郎は鈴木三重吉がモデルかと言われるが、そのおもかげは幾分かはあるにしても、多くの実在人物や小説中の人物などから適当な要素や行動で人物をモンタージュしていく漱石の作風から言って、一人物一モデルということは、少なくとも主要人物については考えられない。

(5) 一生が思想の発展であり、中村真一郎氏の言うように「その思想の発展の各段階にひとつずつ作品を残して行った漱石」の作品には、同一人物名が別の作品にも出てくる。お住は道草にも明暗にも登場する類似の性格の女性であり、佐々木は三四郎にも明暗にも出現する。読者に相互のイメージを重ね合わせ、効果を高めるためであろう。また、名を一字ずつ変えてその前身後身を想像させるのもある。それからの三千代と彼岸過迄の千代、それからの代助と門の宗助などがその例である。代助、宗助は漱石を推定させるためか。代助には、長兄の大助のモジリと、金之助の助が使われ、宗助は、漱石の漱の同音宗が用いられている。宗には宗教の門にまで行く意味もあるのであろう。

(6) 大正3年1月の漱石から畔柳芥舟宛の書翰の中に「僕はいつでも自分の心理解剖であります。僕にはそれが一番強い説明です」とある。漱石自身の心理解剖を助けるものは、日常身辺にある家族や友人や門人たちであろう。心理小説といわれる明暗の中には、いわゆるモデルではないが、身辺の実在人物、もしくは類似の人物が、多数登場する。したがって、その作中人物名も、実在人物と関連するようなものが多い。中には、実在人物の名を特に残すため、と思われるものも若干ある。

(7) 以上を要約すると、漱石の作品中の人物名の埋蔵された意義を発掘する手がかりは、その人物の性格および情景の描写のほか、同一作品内の連関、他作品との関連、漱石自身と家族、親戚、友人、門下生、小屋保治とその縁辺、大塚楠緒子とその親、さらには同女作品の人物などに求められそうである。

Ⅱ 「明暗」の人物名の特異点

1 同一人物名（小林）の出現

(1) 明暗の中の小林さんと小林とは、ただ敬称の有無が異なるだけで、共に名をつけられていない同姓の人物である。

(2) 小林さんは、津田の病氣（痔）を診察して「切開です。切開して穴と腸を一緒にしてしまふんです。すると天然自然割かれた面の両側が癒着して来ますから、まあ本式に癒着ようになるんです」と診察し、根本的治療を施す医師である。素材は漱石自身の体験で、明治45年9月26日以降の断片にある。

(3) 小林は津田の友人で、「小林に啓発されるよりも、事実其物に戒筋かいちよくされる方が遙かにてき顕面で切実で可いだろう」と、事実其物による戒筋即ち津田の分裂した心の、天然自然の癒着を期するための切開の必要を予言する。

(4) 津田の肉体と精神の、それぞれの診察予言者が共に小林姓であることは、作者に意図の存するところであろう。実在人物としては、小林さんは痔の医者ではなく、漱石の修善寺の大患に付き添った森成麟造医師ではなかろうか。漱石はこの人に深く感謝し、その後深い交際を

した。なお、森という字を分析すると木林となる。小林の考え方は森田草平に、ある程度類似の傾向をもっている。作中の藤井（文筆家）の世話になっている。森の字は偶然ながら共通。

2 明暗内の人物名の相互関連

(1) 主人公津田の叔父は藤井である。妹は嫁して堀秀子である。津田の勤める会社の社長は吉川で、夫人と共に媒酌人でもある。かつての恋人であり、今も諦めきれないその人の名は清子である。このように、津田の側と思われる人名は、水かサンズイ偏に関係がある。そして作者は漱石である。これに対して初めから津田を好ましく思っていない岡本や小林は勿論、お金さんや原や三好その他、露以外、水やサンズイ偏とは無縁である。未だ津田と心では合体していないお延も、下女のお時も同様である。友人関は清子と津田との流れを堰きとめる土の関所でさえある。

(2) 作中の主な登場人物名を一枚の紙の上に配置すると、絵画のような関係が出来あがる。遠く、清らかな清水が流れ、それを堰きとめる堰き（関）があり、水は一本の形吉き川となり、中ほどの左側に藤棚の下に井戸のある一軒家がある。近くには津（渡し場）があり田があり、田の間には堀がよどんだ水を浮かせ、水辺に葭（由）が生え、その穂（秀）も見える。津の右手には女（延）が呆然と立ちすくみ、その後には小さな林が二つある。中景は一面の原となり、遠景は、なだらから裾をひいた岡となり、ふもとも見える。

絵画を漱石が愛好したからといって、このような構図を意図していた、と述べているのではない。人物名を選ぶにあたって、作者が無意識のうちに、風景につながる姓や名を選ぶ可能性があったのではないか、と言うに過ぎない。もっとも、日本人の姓はしばしば地名に発し、地名は地形や動植物と縁の深いものが多い。期せずして、人物名による風景画が、おのずからできる場合もあるであろう。

³⁾ 加藤周一氏は、明暗の特徴を挙げてその第四に「最も重大な特徴は絵画的描写がこの小説に甚だ乏しいことである」と言っているが、人物名による絵画性に一驚する。

3 「断片」の人物名との異同

(1) 大正5年初夏頃の明暗の人物名を書いた断片と、実際に書かれた明暗に出てくる人物名を比較すると、断片にあって明暗に出ていない名は、直之助、喜久、喜多、由子、小山などで、姓名ともに記されていたのが姓だけになったのは、岡本精の岡本、吉川正夫の吉川、吉川奈津の吉川夫人等である。断片に記載されていなくて明暗に出ているのは、清子、関、原、時勝さんその他である。

(2) 未完の作品であるので、一応消えた名も中絶以後に出す予定だったかも知れないが、消えた小山は継子と三好の見合の場で「あの猿だ」と岡本が言った猿という渾名あだの、岡本と吉川に共通の友人の名のように思われる。小山、岡本、吉川という名は、関連して風景的である。由子は、津田の妹の秀と堀庄太郎の間の子の名として用意されたものであるが、兄の由雄と由の字を共有するのは、秀の兄に対する近親姦的愛情を示すものか。女性名としての由は、漱石が在家の頃、心から敬愛した嫂登世の死後の季兄和三郎の妻が、道草に出てくる代名である。そして彼ら夫妻の最愛の長女の代名は喜代で、その関連からか、津田の叔父藤井の娘たちは、喜久、喜多の名が断片で予定された。しかし明暗では僅かに二行の間に長女、次女と書かれているだけである。

漱石の生家の紋所は井ゲタに菊で（維新後、菊菱）父の命名した喜久井坂は喜久井町ととして残った。喜久は小説中の人名としても残そうと考えたものか。喜多は硝子戸の中の、子ども

の時分よく長唄の稽古を聞いた、生家の近所の小倉屋の娘のお北さんの名によるものであろう。お北さんは草枕では御倉さんという名で出てくる。心惹かれた人の名を残しておこうと思ったものにちがいない。直之助は吉川夫妻の子ではないが、縁辺の者と推定される。温泉場にも現われるのであろうか。行人の直と金之助に関係がありそうであるがわからない。

(3) 岡本精の精、吉川正夫の正夫、吉川奈津の奈津等の名を消したのは、藤井が始めから姓だけであったのと合わせたように思われる。精は、常に精一ぱい心身を働かす人という感じがする。正夫の正はセイで同音、精に通じ、岡本と兄弟のように仲のよい友人の名としてふさわしい。津田に「もし悪い事があると、僕からお父さんの方へ知らせて遣るぜ」と、正しさを念頭に置く人物のようである。楠緒子の父大塚正男は裁判官であった。奈津は夏目の夏と同訓で、夏目鏡子の一面の性格（門下生や親類や預り人の女性の世話などをした）も共有し、道草の夏は異母姉ふさの代名で、わけのわからぬ実意だてをし馬鹿正直で勝気、細かい所に気をつく女性本能まるだしの女であったが、奈津は、夏の性質から馬鹿正直を除去して、技巧を加えれば、大体似てくるようである。なお、「吾輩は猫である」にも夏は出てくる。

Ⅲ 「明暗」の各人物名

1 津田由雄 延

(1) 津田由雄の津田という姓は、明治38年5月の琴のそら音に津田^{まかた}真方という姓名で出ている。心理学者で幽霊論を著わす文学士である。明暗の津田と同じく、開巻冒頭の文にその姓が明らかにされている。

⁴⁾ 小宮氏の夏目漱石一に、「焼きつけられたように熱い印象」を受けた女性に、愛を通じる方法を持たなかったため「結局漱石は霊の感応といふようなことを唯一の頼みとして、ある時期の間は、生きてるたのではないかと思ふ」とある。琴のそら音は言わば霊の感応の小説である。真方^{まかた}という名は、4月の作幻影の盾から言えば、北^{かた}の方でもなく、南方でもなく、外^{かた}の方でもない。頭をおおう天もなく、「足を乗する地もなく玲瓏虚無の真中^{かた}の方の意味であろう。勿論、真はそら音のそら（虚）に対する真の意味で、靖雄が気のせいから起こす妄想ではなく、霊の感応し合ひ、その方を真方と言ったものと思われる。盾の中の世界、幻影の世界で、南方の日の露に沈まぬうちに、ウィリアム（漱石）がクララ（露子＝楠緒子）に熱い唇をつけることのできる世界である。その真方^{まかた}をツタえて露子に同じ世界に来てほしいのである。楠緒子は西片町^{かた}（西の方）に住んでいた。漱石は伝通院の近くにいた。琴のそら音の中には、伝通院とか、直伝とか、伝染とか、伝わって、とかいう風に、伝の字がよく出てくる。それは、話の内容に関係があるからではあるが、津田という姓とツタえるの伝との重なりも連想させる。

明暗の主人公を津田と命名するとき、同じ姓を使う以上、漱石は当然、琴のそら音の津田を想起しているであろう。由は、～の由の由であり、由来の由であり、理由の由である。先には主観の極致のような真方を伝えようとしたが、今度は自己の過去のある部分を客観的に、その必然の理由に従って、心の由を（由雄）伝えようとしたものとも思われる。

(2) 津田は津多、蔦でもあろう。初期の作品にしばしば出てくる植物である。夏目伸六氏の続父・夏目漱石とその周辺によれば、「ああ此処が漱石の家かと、蔦の葉に蔽われた古びた格子戸の玄関先を……」とある。玄関を蔽っている蔦の名を作者の昔の一面を現わす主人公の姓

と見ることは、津田も漱石も30歳で結婚していることその他を併せて、必ずしも不当ではないと思う。

蔦は何かに依拠して生い茂る。津田が確固たる自己自身を持たず、社長やその夫人などに這いまつわって、出世と金銭と見栄の世界にうごめいているのは、その姓から言ってもふさわしい。また蔦の紋は商家や芸妓がよく用いた。津田の本性を連想させるに足る。

(3) 由雄は明暗に初めて現われるが、由公は琴のそら音に床屋の下剃りの小僧として出てくる。彼は幽霊を馬鹿にする男である。漱石の当時の切ない心境を冷やかした友人かとも思われるがよくわからない。女性名では道草にお由、明暗の断片に由子がある。

由の字義は従うで、たよるの意味もある。また、木の枝を生ずることをいい、女子の笑い貌でもある。蔦とよく呼応する。

由の訓はヨシで、吉し、好し、佳しにも通ずるが、美男の意味のよしであろう。ヨシはまた植物の葭(葦)も連想させ、根強いが中身のからっぽの、風のまにまに左右になびく弱い人間も暗示し得る。

(4) 実在人物としては、美食家で服装を気にした漱石の一断面のほか、小宮豊隆が、まず連想される。佐々木が津田の上役であることや、ずうずうしい一面があり、鏡子に電話かけて、「人の細君を呼び出したりして」と漱石に叱られていること、森田草平が行人の二郎はてっきり小宮かと思っていたと、言ったこと、そして彼が背の高い美男子であったことなどを理由としたい。しかも漱石が人間的に愛し、その心理のすみずみまで理解できた青年であったからである。

(5) 延は断片の始めには、ひらがなでのぶとあり、終わりの方に、延延となっている。津田の伝えると同様の意味で、述べる立ち場にある。

結婚前は叔母の岡本の家で特に義理の叔父とよく気が合い、延び延びと物心両面にわたって幸せな生活をし、京都の生家で津田を知って自ら進んで嫁し、夫の愛を徹底的に独占しようとする。自主的に延びていく女性である。当時として珍しく新しいこの女性の創造には、断片にある津田青楓の先妻山脇敏子と漱石との対話なども、相当役に立っていることであろう。

夫にひそかな思い人があって苦しめられる境遇は、鏡子に似てはいるが、若干の類似点はあるにしても、その影はうすい。むしろ延という名は漱石が机上にプロマイドを飾っていたという新橋のおえん→お延→おのぶという命名のように思われる。おえんは、⁵⁾「瓜実顔の何処かに理知の影の見えるような、きりっとした面差し」であったというから、それは楠緒子によく似た顔でもある。楠緒子は硝子戸の中に、「実はどこの美しい方かと思って見ていました。芸者じゃないかしらとも考えたのです」とある。楠緒子の母親らしい人を、「芸者上りの見栄坊」と言って、後で「少々存意あって心になき事迄も書いた」と子規宛の書翰で断っている。お延は、すばらしい美人としては書かれていないが、楠緒子の母親の仲子ぐらいに想定したのかも知れない。派手なことは共通している。

2 藤井 朝 真事 真弓

(1) 藤井は「遂に活字で飯を食わなければならない運命の所有者に過ぎなかった」と作者が説明しているように、文筆家である。その上「実人生にうとい反面、甚だ鋭利な観察者であった」となると、漱石の一分身ともなる。井の字がついていることも漱石の家紋と関係があらう。藤は蔦に似てはいるが、木は大きく、花も美しい。既に藤井は津田ではない。

(2) 朝は43、4歳でありながら、同年輩の吉川夫人と違って性の感じを離れた自然さがあった。朝の気分のようにさっぱりしている。あるいは藤と対応して同類の朝顔の朝かも知れない。鏡子は無類の朝寝坊であり、さっぱりしている性質などを思い合わせて、鏡子の一分身の名としたのではなかろうか。

(3) 真事は藤井の小学2年生の次男で、手品をマコトと信じたり、同年の岡本一に百円やると言われて、土木工事のために深く掘り返されて、往来の真中に出来上った穴にかけた一本杉を背のうを背負って靴をはいたまま渡ったりする、一途な無鉄砲な子である。真事と琴のそら音の津田真方の名が似ているのは、血縁関係を表わしたものか。なお、漱石の次男伸六を、2番目の男の子であるので伸二とすると、シン(真)ジ(事)で真事となる。

(4) 真弓は真事の兄である。中庸に「誠者天之道也」とある。誠の兄は天である。蒼穹は青空のこと、真弓は真の空、天でなければならない。「その福岡は長男の真弓^{まゆみ}が今年から籍を置いた大学の所在地でもあった」の一行の文にだけ出る長男に、わざわざこの名をつけたのは、いかにも則天去私の漱石らしい。なお彼岸過迄の須永の生母の名も弓である。

3 岡本 住 継子 百合子 一

(1) 岡本 漱石の作品中、岡のつく姓は、行人に岡田それから平岡があり、いずれも躁うつ気質型のようにである。行人のH氏の型である。川や井ではない。岡本は特にはっきりしており、「肥った身体に釣り合わない神経質の彼には時々自分の室に入ったぎり半日位黙って口を利かずにいる癖がある代わりに、他の顔を見ると、また何かしら喋舌^{しゃべ}らないでは片時もいられないといった気作な風があった」とある。お延とびったりうまの合う岡本は、初めから津田をお延とは異質であるとし、相和する男でないことを見破っていた。

漱石の気質については、医学的心理学的に諸説があるが、分裂気質型の要素が強く、躁うつ気質型の要素もある程度併有しているように思われる。岡本は漱石の躁うつ気質型の一分身のようである。なお漱石は岡本と同じく糖尿病も患っていた。身边には、一時養子にしようとも思った岡田耕三^{すみ}がいる。

(2) 住は自伝的小説といわれる道草では健三(漱石)の細君の名であった。明暗では岡本の細君の名となっているが、お延から見ると、その性格は羨ましくもあり、また忌まわしいのであった。異質なのである。「じゃああたしは御免蒙ってお先へ湯に入ろう」と岡本の潔癖を知っていて断行して顧みない女性である。鏡子の漱石の思い出、四新家庭にそれらしい記述がある。伸六氏のいうように「男のようにさばさば」していたらしい。住は本質的に鏡子の名である。薤露行に「うつせみの世を、うつつに住めば、住みうからまし、むかしも今も。うつくしき恋 うつす鏡に、色やうつろう、朝な夕なに。」とある。現実世界に住む鏡子の鏡に、漱石の夢の恋がはっきり映らなくて幸いであった。

(3) 継子^{つぎ}は、父の岡本とお延の会話に、「何よりもって恐悦至極」などと先刻聞いた役者の言葉を小さな声で後へ付け足し、自分ながらその大胆さに呆れたように薄赤くなる女性である。妹に欲張屋さんと渾名を付けられるほど多くの稽古^{けいこ}に通う継子である。水も滴るような美人である点は道草の縫^{あだ}が思い出され、縫う、継ぐという連想による名とも考えられる。また、中庸に「善継人之志、善述人之事」とあり、継ぎと述^のぶも関連がある。

(4) 百合子 百合は漱石と楠緒子の両者の作品中にしばしば出てくる草花である。百合子は

「前に追い出される？そいつは少し——まあ我慢してなるべく追い出されないようにしたら可いでしょう。此方の方の都合もある事だから」とお延の冗談に、ユーモアと才気にあふれた返事をする遠慮のない少女である。伸六氏が、「父はこの姉を一番可愛がっていた様である」と記している四女アイの言いそうなことと思いながら、漱石はこれを書いたのかも知れない。百合は百アイと分解できる。

(5) ^{はじめ}一が「先刻何かに拗ねて縁の下へ這入ったなり容易に出て来なかった」などの話は、断片にある、純一と伸六が類似のことをしたことに拠る。一は純一の一を名としたものであろう長男の意味もある。

3 吉川 吉川夫人 三好

(1) 吉川は^{よし}葎川で、葎の生えている川であろうか。葎のような由雄が由る川である。明暗双々の現世に生きる津田には、未だ自由は成らない。^{よし}葎は^{あし}葦でもあり、吉は同時に凶でもある。有夫の清子に恋着すれば、死ぬ以外に途はない。楠緒子の婿選を頼まれた大学の舎監清水氏の清水は、候補にあがったときは吉き川に思われても、今や恋に破れては、にわかには越えられぬ大河と感ぜられ、死水、死の川、三途の川とも見えるであろう。幻影の盾に、盾の蛇の毛が「下に動くときにも上に揺り出す時も同じように清水がなめらかな石のあいだをめぐるときのような音が出る。」清水氏の円転な取りまとは、漱石にうめきの微音を起こさせる。「前の世のささやきを奈落の底から夢のあいだに伝えるように聞かれる」とある。

(2) 吉川夫人は、細工をして津田を清子のいる温泉場に行かせて対決させ、かつお延の慢気をこらしめようとする。鏡子の言動は、36、7年頃、小刀細工とのみ漱石の眼に映っていた。なお、蔦はなつづたともいう。吉川奈津は津田と同類でもある。

(3) 三好は「見好し」で、朝の津田に対する評「人間は好い加減なところで落ちつく」と、大変見っとも好いんだがね」に対するものか。吉川夫人は継子との見合いの場で「あなたのような落着いた方でも、少しは^{あわて}周章てたでしょうね」と言っている。落ちついているから見好しである。

4 小林さん 小林 原 お金

(1) 小林さん 漱石の痔を手術したのは、東洋肛門病院の佐藤副院長である。院長は森直郷であった。いずれにしても痔の手術は、修善寺の30分死んでいたという大患とは違ふ。津田の精神面の業病と釣り合わない。結核性ではないと医師も断言している。重い方の病気の医師の名、森成麟造を小林さんの命名の根拠としたものと推定する所以である。

(2) 小林は「思わせぶりな利他主義を粉飾しようと、やはり卑俗な階級的エゴイズムの域を脱していない」と猪野謙二氏は言う。非余裕派を代表するなら、津田などにかかわり合っていないでもよいのである。その言動も一貫せず男らしくない。津田と根を同じうする人間である。告白癖その他、森田草平のイメージが、ある程度、合うようである。

(3) 原は小林より若くて性格は純朴である。野原と命名しなければならぬほど野生的でもない。三四郎に出てくる芸術家は原口であったが、それほど世間に深く接してもいない。

なお、坑夫に飯場頭として原駒吉が出てくるが「今もって自分は好い名だと思っている」とある。

(4) ^{きん}金 ^{かね}金に余裕のない小林の妹が金とは皮肉である。金力権力を嫌い恐れた藤井が^{きん}金を手もとにおいているのも皮肉である。しかし、そういうアイロニーによる名ではない。娘の嫁入

りには、恐ろしく金がかかることを漱石は親戚の預り娘で体験した。そういう意味の命名であろう。と言っても、お金では露骨すぎる。なお、漱石が京都で話をした芸妓に彼と同名の金之助という女があった。

5 堀庄太郎 秀

(1) 堀庄太郎 堀については道草に「其処には往来の片側に巾の広い大きな堀が一丁も続いてゐた。水の変らない其処の中は腐った泥で不快に濁っていた」というイメージが記されている。庄太郎は、夢十夜の第八夜と第十夜に出てくる女ずきの好男子の名である。そしてその原型と考えられる高田庄吉は、浮気者で、異母姉さわの夫である。また、断片に小三婆さんの話として、「堀江の暗いやな家へ五百円の約束で行く事になった」という記述もある。いずれにしても堀のイメージは、汚濁に満ちており、庄太郎は明暗にも「放蕩の酒で臟腑を洗濯されたような…」とある。

(2) 秀 ひでは秀出づの約転で、秀づ、秀でとなったもので、延が横に延長する感があるのに対し、秀は縦に伸長する感じが強い。既に二人の子持ちで世帯じみている。お延は、岡本や津田によりかかっているが、「自分で自分の理窟を行為の上に運んでいく女」であるが、お秀は「藤井に教育された結果」「自分より書物に重きを置くようになった」つまり秀は、器量に秀でていることは勿論、生活も議論も分裂したままで秀で、お延が岡本に似て生活と理論が一体化しているのと対比的である。なお、ヒデとフデとは、一音、しかも接近音の違いである。漱石の長女筆子の名との関連を感ずる。

4 佐々木 時 勝さん

(1) 佐々木は津田の上役であるが、この姓は三四郎に年上の友人佐々木与次郎として出ている。明暗における記述は、僅か3行の間に3回くり返して出ているだけで、それだけのことにわざわざ佐々木と命名したのは、津田を小川三四郎の後身らしく見せる用意でもあろう。

(2) 時は津田の家の下女である。どんな名でもよいのに、鏡子の次妹鈴木時子の時を使ったのは、鏡子側の親戚とは一切自分では交際しなかった漱石が、この鈴木夫妻とだけは仲よくしていたので、ここにその名を残したものと思われる。

(3) 勝さんは湯治場の「四角な顔の小作りな男」で、さっさと喋舌るだけ喋舌って、洗う方を切り上げてしまいう湯番である。別段命名の必要のない人物であるが、次兄栄之助の妻で、兄の死後、漱石がわざわざ岡山まで再婚の祝いに行った嫂小勝を、男性名化したように思う。小作りと断わってある。好意をもつ人への記念のためであろう。彼女は⁹⁾「近所の子供たちや犬などの動物を可愛がり、よく風呂に入れて洗ってやったといわれる」また、門に近所の肴屋の名として、魚勝が出てくる。

5 清子 関

(1) 清の名は下総生まれの頬ペタの赤い下女として、まず琴のそら音に現われる。坊っちゃんでは、坊っちゃんびいきの下女の名となり、門でも下女の名として使われ、彼岸過迄では、宵子のもりをしている下女の名である。幻影の盾の「純一無雑の清浄界」の清であり、薤露行のエレーンはランスロットを慕って死に、死ぬるまで清き乙女である。また楠緒子の作品に清子があり、これは嬰兒で死んだ三女寿美の代名で、かつ題名である。清は、名としてはキヨ、スミ、スガと読む。積名に「清青也去濁遠穢色如青也」とある。水のスミで明なることであ

る。青は説文に「東方色也木生火従生丹，丹青之信言必然と註す」とある。水が必然に流れ澄んでいるのが清子である。お延には技巧がある。清子は「いつでも優悠としていた。どちらかと云えばむしろ緩漫」であった。お延は「随時随所に精一杯の作用を恣のままにする」ので「勢い津田は始終受身の働きを余儀なくされた」が、清子と対するとなると、「積極的に作用」することができた。「単純とより解釈できない」清子である。しかしその清子の耳朶はうすい。必然は人の世に幸せのみをもたらすとは限らぬ。津田の来訪に際して新しく活けた花も寒菊であった。なお、関係はないが、夏目鏡子は、もとキヨであった。

(2) 関 清子から津田への流れを堰きとめた関所は関である。漱石には、小屋は「いぶせき」小屋であったであろう。なお、それから出てくる関は、平岡の部下で、芸妓と関連あって会計に穴をあけ免職になった男である。放蕩性は明暗の関も継承している。

6 露 土 つや 常 つき

(1) 「栃木県出の看護婦の頭文字がつということがわかって……『露か』『いいえ』『成程露じゃあるまいな。土か』『いいえ』『まぢたまえよ。露でもなし土でもないとする。——ははあ解った。つやだろう。でなければ常か』津田はいくらでも出鱈目を云った。……仕舞に彼女の名がつきと判然った時、彼はこの珍しい名を弄んだ。『お月さんだね。すると。お月さんは好い名だ。誰が命けた』と明暗にあるが、痔で漱石が入院中、これに似た話が群馬県出の看護婦との間に交わされている。看護婦都丸しくが「内のものはみんなくの字がつきます」と言ったことが断片にある。

(2) 露 薤露行は古の挽歌、王侯貴人の喪に用いた。その作中に「可憐なるエレーンは……ひそかに墜ちし春の夜の星の、紫深き露に染まりて月日を経たり」とある。既に前作琴のそら音では既述の如く露子が出ており、楠緒子作品の客間の女主人公の名でもある。はかなげに美しく気高くさえある楠緒子の清き死を、漱石はひそかに願っているような命名である。

(3) 土、月 夢十夜の第一夜に、「輪郭の柔らかな瓜実顔の女が、死んだら埋めてください……天から落ちて来る星の破片を墓標に置いてください。そうして墓のそばに待っていてください。又会いに来ますから」と言って死に、「自分はそれから庭へ下りて真珠貝で穴を掘った。土をすくうたびに貝の裏に月の光がさしてきらきらした。湿った土の匂いがした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そうして柔らかい土をそっと掛けた。掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した」などによるものであろう。

(4) つや 坑夫の中の坑道から脱出しようとする主人公が、「自分の影身に付き添っている——まあ恋人が多いようだが——そう云う人々の魂が救ったんだともなる。年の若い割に自分がこの声を艶子さんとも澄江さんとも解釈しなかったのは、己惚の強い割には感心である」を思い出したものであろう。

(5) 常 以上四つの名がすべて幻想の世界のものであるのに対し、これだけが現実日常世界の者の名である。前出養母おやすが道草で出る代名が常。なお恒子とすれば漱石の次女。

IV 補 遺

1 琴のそら音と明暗の人名

(1) 琴のそら音に出現する人名は、津田真方、K君、靖雄、宇野、露子、清、源さん、由公

作蔵などであるが、K君と靖雄は同一人物で、明暗に関係のないのは、端役の源さんと作蔵、および名だけの宇野である。

(2) 由公は端役のようで実は然らず、津田真方の信ずる幽霊を馬鹿にしている小僧である。幻想の中にある真実など、あったらお目にかかりたいという男である。遂に明暗では真方に代わって津田由雄となる。津田真方は、津田としてそのまま残るとともに、蔦（漢名常春藤）は別途、藤にも変わり文筆を続けるとともに、真弓（天）と真事（誠）を子に持ち、理想を追求する。藤井の井は本来は井戸ではなく、村の意味で、日本ではアクセサリーとして、金井、酒井などにつけた。Kは小屋の頭文字、靖（保）雄は雄のみ残って、由公の由と合体して由雄となったものか。実質的にはK、靖雄は関となった。

2 幻影の盾と明暗の人名

(1) 思う人は「小山を三つ越えて大河をわたりて二十哩先の夜鴉の城にいる。夜鴉の城とは名からして不吉である」とウイリアム（漱石）は時々考える。漱石の地獄図絵における三つの小山は、剣の山と針の山と小矢？（盾は小屋の楠緒子への愛の小矢を防ぐ）の山か。大河は三途の川で、二十哩先の夜鴉の城とは、 $(20 = 4 \times 5)$ 死後参る先の、夜鴉が群集する大きな土の城、大きな墓即ち大塚ということであろう。楠緒子はそこに住む、思い人クララである。それにしても大きな墓を名とする城は不吉である。三途の川の名も忌まわしい。しかし、漱石は楠緒子亡き後、次第に暗の地獄から脱して明暗渾沌の現実世界に戻る。そこから昔時の、人に言えぬ由来を津田や延などの眼を借りて克明に述べ伝えようとしている。「人に言えぬ盾の由来の裏には人に言えぬ恋の恨みが潜んでいる。人に言わぬ盾の歴史のうちには世もいらぬ神もいらぬとまで思いつめたる望みの綱が繋がれている」

(2) 現実世界には剣の山も針の山もない。それらは、痔の切開手術の刀を執る小林さんと、口に針をふくんだ毒舌の小林となり、二つの山は二つの小林に変わった。小矢？の山は小山となるのであろうが、まだ登場しない。不吉な三途の川は同時に吉なる川、吉川でもあり、渡しの婆は吉川夫人でもある。夫人の、自らも覚らざる魔性から出る細工は、図らずも夏蔦を延びるにまかせて、津田とお延をどこまで、もつらせようとするのであろうか。しかし、清子（必然・自然）は、津田を迎えるために新しく寒菊を活けた。「有る程の菊拗げ入れよ棺の中」と楠緒子の死を弔った漱石に代わって、津田は逆に寒菊を手向けられる「宿命」であるように思われてならない。

3 漱石の家族と明暗の人名

漱石の家族は鏡子、筆子、恒子、エイ、アイ、純一、伸六であるが、鏡子は真澄の鏡で住、筆子は秀、恒子は常または継、アイは百合（百アイ）、純一は一、伸六は真事（伸二）で、エイひとりを残して、全員縁のある名が出ている。さらに鏡子の妹時子は実名のまま、漱石の嫂小勝は男性名で勝さんとなっている。

参 考 文 献

- 1) 荒 正人, 漱石文学全集, 9, 明暗解説, P.709, 集英社 (1972)
- 2) 和田謹吾, 国文学 (漱石文学の変貌), P.83, 八木書店 (1974)
- 3) 加藤周一, 日本文学研究資料叢書, 夏目漱石, P.273, 有精堂 (1973)
- 4) 小宮豊隆, 夏目漱石, 一, P.181, 岩波書店 (1952)
- 5) 6) 小坂 晋, 漱石の愛と文学, P.22, 23, 講談社 (1974)